

あか ぶち い せき なか かわ はら こ ふん

赤渕遺跡・中川原古墳

発掘調査報告書

1992

掛川市教育委員会

あか ぶち い せき なか かわ はら こ ふん

赤渕遺跡・中川原古墳

発掘調査報告書

1992

掛川市教育委員会

序

近年、全国各地において自然環境や文化遺産を大切にし、郷土のすばらしさを再認識するとともに、それを活用したまちづくりが進めらるようになっています。

掛川市は面積も広く、豊かな自然の恵みが多く残されています。また、この地域は遠く縄文時代より、人々の暮らしや市内各所に遺跡が存在しています。現代に生活する私たちの文化も、こうした先人の生活の積み重ねの賜物であると思います。

遺跡は歴史を知るための貴重な資料であり、また破壊されると再びもとに戻すことはできません。先人に対する感謝の心を失うことなく、こうした文化遺産を継承していく努力は私たちの責務でもあります。

今回、家代土地区画整理組合が設置され、約30万m²の区画整理事業を実施することにともない、掛川市教育委員会が該当地区内の埋蔵文化財の調査を行うこととなりました。

発掘調査は区画整理組合役員、土地所有者や地元住民の方々の深いご理解とご協力により、周到な準備を経て実施されました。

発掘調査は慎重に行われ、その結果、古墳時代の竪穴住居や円墳などの遺構が検出され、また、馬具や玉類、鉄斧、鉄剣、土器などの貴重な遺物が発見されました。

このような地道な発掘調査の成果を積み重ねていくことによって、生涯学習都市掛川市の文化財愛護がより深まり、まちづくりが一層充実発展するように願ってやみません。

最後に本書の刊行にあたり、関係者各位のご協力とご指導に対し厚くお礼申し上げます。

平成4年3月吉日

掛川市教育委員会

教育長 西ヶ谷兔志雄

例 言

1. 本書は、掛川市家代地区画整理事業（静岡県掛川市家代字赤瀬ほか）に先立ち、平成2年7月10日から同年9月30日（第1次）、平成3年8月1日から同年10月31日（第2次）の2カ年にかけて行われた埋蔵文化財発掘調査報告書である。
 - ・第1次調査 長沢遺跡・打越遺跡
 - ・第2次調査 赤瀬古墳群・中川原古墳
2. 今回の調査は、「掛川市家代地区画整理事業用地内埋蔵文化財発掘調査業務」として、掛川市家代地区画整理組合の委託により、掛川市教育委員会が受託し調査を実施した。
3. 現地の発掘調査は、第1次調査では掛川市教育委員会の戸塚和美が担当し、第2次調査では同教育委員会の大熊茂広・戸塚和美が担当した。
4. 現地作業ならびに整理作業では、次の方々の参加を得ている。

竹下英夫・山田繁治・戸塚英雄・青島信二・深田好徳・安間篤・木村治郎・松井肇・鈴木辰江・長谷川幸子・伊藤和子・鈴木はつ子・松井田鶴子・榛葉たみ江・原田てい子・中村すま子・石川きみよ・井野鈴江・松井しか・吉川幸子・吉川利子・平尾民子・戸塚春代・平尾なみ子・平尾民子・山内よし江・袴田きよ・石亀まつ・荻田かく・山崎国・堀内ひろ・鈴木秀子・鈴木美代子・大石トモ・松浦てつ子・榛葉うた子・鈴木静江・弓引きよ・山崎智広・袴田佳秀・松浦健・宮崎靖之・柳原通伸・向井多賀子・榛葉豊子
5. 現地調査ならびに本書作成にあたり、次の方々から御教示・御協力を得ている。

川江秀孝・吉岡伸夫・松井一明・加藤理文・鈴木敏則（順不同、敬称略）
6. 本書の編集は戸塚和美が行った。遺物の実測・トレース・遺構のトレースは戸塚と大熊が分担しておこなった。執筆は目次に示したとおりである。
7. 発掘調査業務は、掛川市教育委員会教育長西ヶ谷免志雄・社会教育課長榛葉稔・社会教育課参事岩井克允のもとに社会教育課が所管した。
8. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 掲図における方位は、磁北を示す。（1991年10月現在）
2. 本書で使用した遺構名称は下記の意味である。

S B : 壁穴住居跡 S F : 土塙 S D : 溝状遺構 S P : 小穴 S X : 性格不明遺構
3. 本書で使用した遺構番号は、原則として現地調査時のものをそのまま使用することとしたが、赤瀬遺跡内及び周辺で発見された3基の古墳は新発見であったため、調査終了後同古墳群として子字を冠し赤瀬古墳群（1・2号）とした。
4. 遺物の番号は、掲図と写真図版と同一である。
5. 掲図で使用したスクリーントーンは下記の凡例にならう。



= 撥乱



= 焼上

目 次

序	
例 言	
凡 例	
I 発掘調査と遺跡の概要 〈戸塚〉	1
1. 調査に至る経緯と調査の目的	1
2. 調査の方法と経過	1
3. 遺跡をめぐる環境	2
II 調査の内容	5
1. 遺 構 〈戸塚・大熊〉	5
1) 赤瀬遺跡 (赤瀬古墳群1号墳)	5
2) 赤瀬古墳群2号墳	12
3) 中川原古墳	19
4) 打越遺跡	20
5) 長沢遺跡	23
2. 遺 物 〈戸塚〉	26
1) 土 器	26
2) かわらけ・陶磁器	26
3) 鉄 製 品	27
4) 装 身 具	28
5) 古 銭	30
III ま と め 〈戸塚〉	31

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図	3
第2図 遺跡の周辺地形図	4
第3図 赤渕遺跡遺構全体図	5
第4図 S B 0 1 実測図（1）	6
第5図 S B 0 1 実測図（2）	7
第6図 赤渕1号墳実測図（1）	8
第7図 赤渕1号墳実測図（2）	9
第8図 赤渕1号墳主体部（S F 0 1）実測図	10
第9図 溝状遺構実測図（1）	11
第10図 溝状遺構実測図（2）	12
第11図 赤渕2号墳実測図	13
第12図 赤渕2号墳主体部実測図	14
第13図 中川原古墳実測図（1）	15
第14図 中川原古墳実測図（2）	17
第15図 中川原古墳主体部（S F 0 1）実測図	18
第16図 中川原古墳S F 0 2 実測図	19
第17図 打越遺跡遺構全体図実測図、S F 0 1・ピット実測図	21
第18図 S X 0 1・ピット実測図	22
第19図 長沢遺跡全体図	23
第20図 長沢遺跡遺構全体図	24
第21図 S X 0 1・0 2 実測図	25
第22図 出土土器実測図	27
第23図 出土かわらけ・陶磁器実測図	28
第24図 鉄製品・装身具実測図	29
第25図 古銭拓影図	30

図版目次

- 図版 I 上 赤瀬遺跡全景（西より）
下 赤瀬遺跡 S B 0 1 全景（北より）
- 図版 II 上 赤瀬 1 号墳全景（西より）
下 赤瀬 1 号墳主体部（北より）
- 図版 III 上 赤瀬 2 号墳全景（西より）
下 赤瀬 2 号墳主体部（南より）
- 図版 IV 上 中川原古墳全景（南より）
下 中川原古墳主体部（南より）
- 図版 V 上 赤瀬 1 号墳主体部疊出土状態
中 赤瀬遺跡溝群（SD 0 3 他）全景（西より）
下 赤瀬遺跡 S B 0 1 遺物出土状態
- 図版 VI 上 赤瀬 2 号墳主体部鉄剣出土状態
中 中川原古墳全景（北より）
下 中川原古墳 S F 0 2 全景（南より）
- 図版 VII 上 長沢遺跡全景（北より）
中 長沢遺跡 S X 0 1 疊出土状態（東より）
下 長沢遺跡 S X 0 2 疊出土状態（東より）
- 図版 VIII 上 長沢遺跡 S X 0 2 全景（東より）
中 打越遺跡全景（東より）
下 打越遺跡 S X 0 1 遺物出土状態
赤瀬遺跡出土土器
- 図版 IX 打越遺跡・中川原古墳出土かわらけ・陶磁器
- 図版 XI 赤瀬古墳群・中川原古墳出土鉄製品・装身具
- 図版 XII 打越遺跡・中川原古墳出土古銭

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と調査の目的

掛川市は、昭和63年の新幹線掛川駅開業を契機として益々の発展が予想されることとなった。区画整理事業による東部工業団地をはじめとする企業進出も著しく、比較的安価な工業適地を求め、今後多くの工場立地が予想される。これらの発展は、当然人口増に結び付くものであり、加えて宅地の需要増となるわけであるが、近年全国的にみられる土地投機による地価高騰、耕作放棄現象、乱開発等の土地問題は、市内においても例外ではなく宅地の安定供給を困難なものにしている。その対策として、区画整理事業等の先行した都市基盤整備が必要となるのである。

掛川市の家代地区においても、こうした時勢の中で、山林、水田、茶園を主体とする未整備地を新たに住宅地として開発する土地区画整理事業が、平成元年3月に「掛川市家代土地区画整理組合」設立をもってスタートした。

今回の家代土地区画整理用地は、総面積30万m²にも及ぶもので、そのほとんどが農地（水田・茶園など）、山林、原野を主体とする未整備地であった。用地内には古墳をはじめ数ヶ所に埋蔵文化財が所在することが「掛川市遺跡地図」との照合により周知されていたが、丘陵地形などから見て更に多くの古墳等の存在が予測された。平成元年10月から、掛川市家代土地区画整理組合、掛川市役所区画整理課、掛川市教育委員会の三者間で、それら埋蔵文化財の取り扱いについての協議が開始された。事業計画によれば、用地の有効利用、周辺地、特に隣接する「県総合教育センター（仮称）」との整合性等の観点から、これら埋蔵文化財の破壊は免れないものと考えられた。掛川市教育委員会では同年11月、用地内の埋蔵文化財分布踏査を行い、調査対象地を確認、その結果を報告した。この分布踏査結果をもとに協議を重ね、平成2年2月20日に発掘調査の方法、時期、経費負担等について相互に確認した。

今回の発掘調査事業は、掛川市家代土地区画整理組合と掛川市教育委員会とで交わされた「掛川市家代土地区画整理事業用地内埋蔵文化財発掘調査事業委託契約」締結をもとに記録保存を目的として行われた。

2. 調査の方法と経過

1) 発掘調査の方法

現地踏査によって古墳、集落跡と考えられた調査対象地に、幅1~1.5mの造構確認用トレンチを任意に設定した。古墳と思われる尾根の高まり部分ではトレンチを十文字に組み、集落跡と考えられる赤測道跡の緩斜面では10m間隔で平行するトレンチを4本設定した。これらのトレンチを掘削し、造構の遺存状況を確認後、必要な範囲を平面発掘調査した。

各古墳、集落跡ごと、検出された順に造構番号を付し、遺物はその造構ごともしくは実測用の5m方眼のグリッド単位で取り上げた。

現地での図面作成は、墳丘・住居跡は20分の1を基本とし、主体部・遺物の出土状態等は10分の1と20分の1を併用した。

写真撮影はプロニーサイズ〔6×7〕原画（白黒）、35mmサイズ原画（白黒・リバーサル）を併用

した。

2) 経 過

- ・第1次調査（平成2年7月10日～9月30日）
 - 7月10～20日 トレンチによる遺構確認作業（長沢遺跡ほか1地点）
 - 7月21～ 長沢遺跡の平面調査（全体掘削）
 - 8月10日 集石遺構検出、写真撮影、実測作業
 - 8月11～18日 調査区の写真撮影、全体測量
 - 8月20～31日 トレンチによる遺構確認作業（打越遺跡ほか1地点）
 - 9月1～11日 打越遺跡の平面調査（全体掘削）
 - 9月12～24日 遺構掘削、遺物取り上げ、写真撮影、実測作業
 - 9月25～29日 調査区の写真撮影、全体測量
現地撤収作業
- ・第2次調査（平成3年8月1日～10月31日）
 - 8月1～5日 器材搬入、周辺整備
 - 8月16～26日 トレンチによる遺構確認作業（中川原古墳ほか1地点）
 - 8月27～ 中川原古墳の平面調査
 - 9月10日 遺構掘削、遺物取り上げ、写真撮影、実測作業
 - 9月11～20日 調査区の写真撮影、全体測量
 - 9月9～16日 赤渕遺跡トレンチによる遺構確認作業
 - 9月17～30日 全体掘削、遺構確認
 - 10月1～20日 遺構掘削、遺物取り上げ、写真撮影、実測作業
 - 10月21～31日 調査区の写真撮影、全体測量
- 10月1～7日 トレンチによる遺構確認作業（2地点）
- 10月8～12日 赤渕2号墳の平面調査（全体掘削）
- 10月13～16日 遺構掘削、遺物取り上げ、写真撮影、実測作業
- 10月17～24日 調査区の写真撮影、全体測量
- ～31日 現地撤収作業

3. 遺跡をめぐる環境

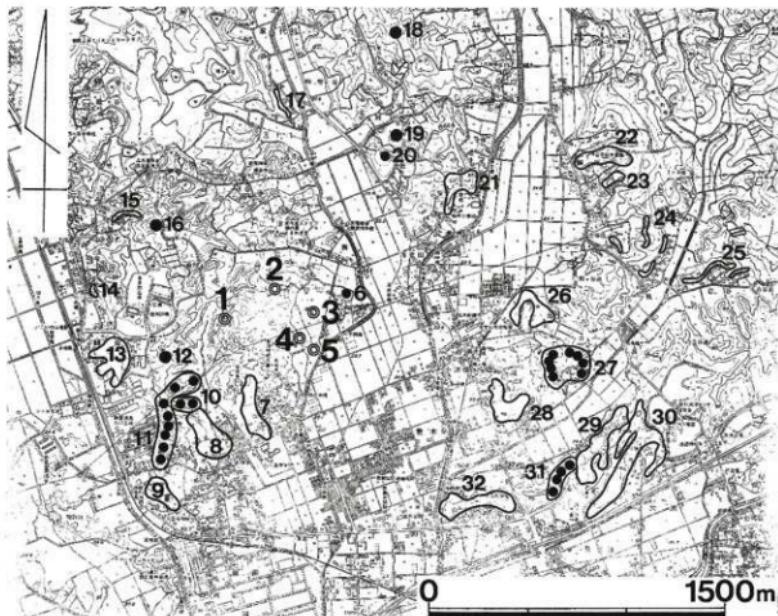
市内西部域を流れる原野谷川流域では沖積地が発達しており、沖積地の端では中小河川によって開析され大小の谷が無数にしかも複雑に入り込んでいる。

今回の家代地区の対象用地は、原野谷川の支流である家代川の右岸に開析された谷底と丘陵が相互し、水田を主体とするわずかな平地から成っている。

次に、家代川流域を中心に周辺の遺跡分布について概観してみたい。家代地区では今まで発掘調査例がほとんどないため遺跡の分布状況については、採取遺物と周辺地形とで想定された「掛川市遺跡地図」のみに頼らざるおえないことを断わっておかなければならない。

原野谷川流域の沖積地に比べ支流域のそれは絶じて自然堤防が未発達であるため遺跡の立地はみられないが、沖積地に張り出す舌状丘陵の微高地には、弥生時代後期以降に成立する赤渕・森平・富部遺跡などが点在し、丘陵の尾根上に赤渕・長沢・権田谷・富部古墳群が分布するとされる。しかし遺跡の性格、古墳群については時期など不明な点が多い。ちなみに、原野谷川右岸に展開する河岸段丘の和田岡原では該期、特に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡は爆発的に増加し、規模も広範囲にわたって展開される中核的集落が現れる。古墳時代中期には各和金塚・高田瓢塚・吉岡大塚などの前方後円墳や春林院などの大型円墳で構成される中遠地方屈指の古墳群である和田岡古墳群が追営される。

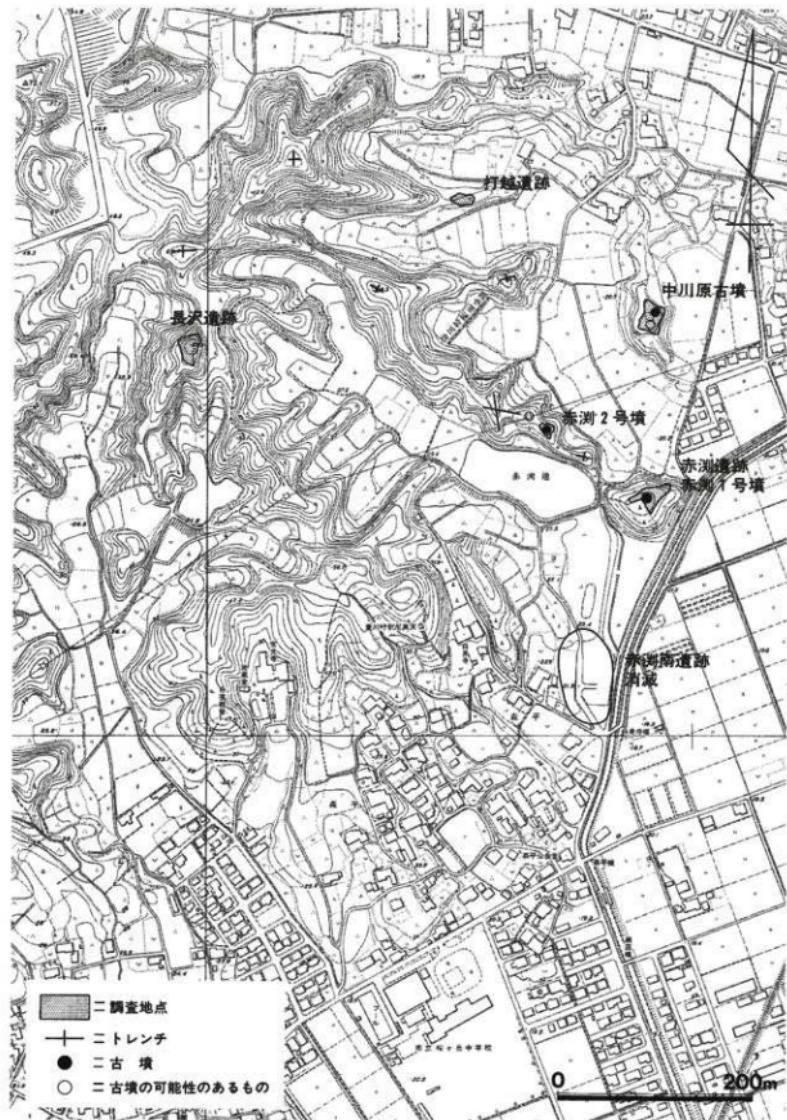
市内をはじめとする当該地域の古墳時代後期の特色である横穴群は、この地区にも見られる。その内調査によって概要のわかるものは、原野谷川左岸の土橋横穴群（8基）や垂木川流域の峯横穴群（既調査15基、全体では30基程か？）・別所横穴群（2基）などである。垂木川中流域の飛島・岩谷横穴群などに比べるといずれも小規模な横穴群が点在する。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

遺跡地名

1. 長沢遺跡
2. 打越遺跡
3. 中川原古墳
4. 赤渕2号墳
5. 赤渕遺跡・赤渕1号墳
6. 桶田遺跡
7. 森平遺跡
8. 富部遺跡
9. 二反田遺跡
10. 富部古墳群
11. 長沢古墳群
12. 土橋横穴群
13. 山崎遺跡
14. 其佐ヶ谷横穴群
15. 堂前横穴群
16. 堂前遺跡
17. 味噌ヶ谷横穴群
18. 天段古墳群
19. 別所横穴群
20. 別所横穴群
21. 峰遺跡・峰横穴群
22. 鰐原北遺跡
23. 鰐原南遺跡
24. 鰐原横穴群
25. 岩谷横穴群
26. 小島遺跡
27. 蔵人遺跡
29. 源ヶ谷遺跡
30. 六ノ坪遺跡
31. 源ヶ谷古墳群
32. 小山平遺跡



第2図 遺跡の周辺地形

II 調査の内容

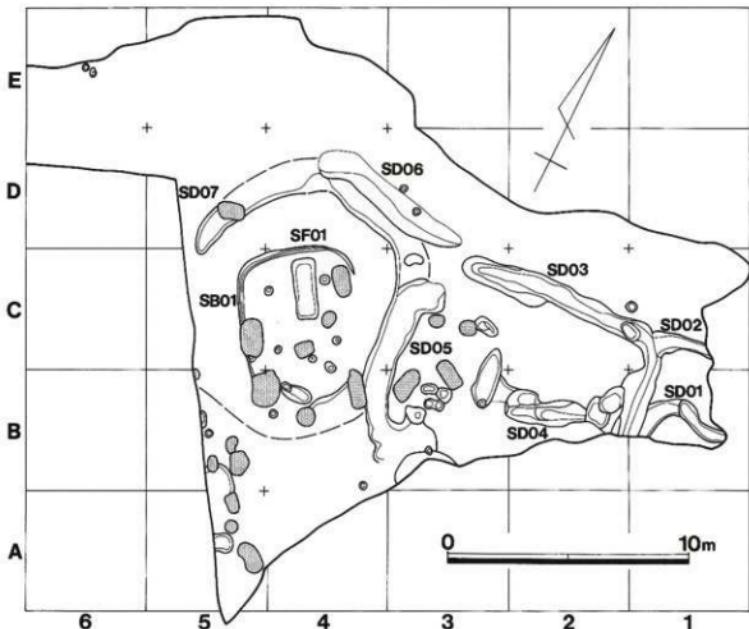
今回の用地内での調査対象地は11地点であったが、トレンチによる確認調査の結果、遺構・遺物の確認された5地点について引き継ぎ平面調査を行った。

調査は造成工事の関係から用地を北西部と南東部の2区に分け、北西部の長沢遺跡・打越遺跡を第1次（平成2年7月10日～同年9月30日）、南東部の赤沢遺跡・赤沢古墳群・中川原古墳を第2次（平成3年8月1日～同年10月31日）の2カ年かけて行った。以下、遺構・遺物の順に各遺跡を説明していく。

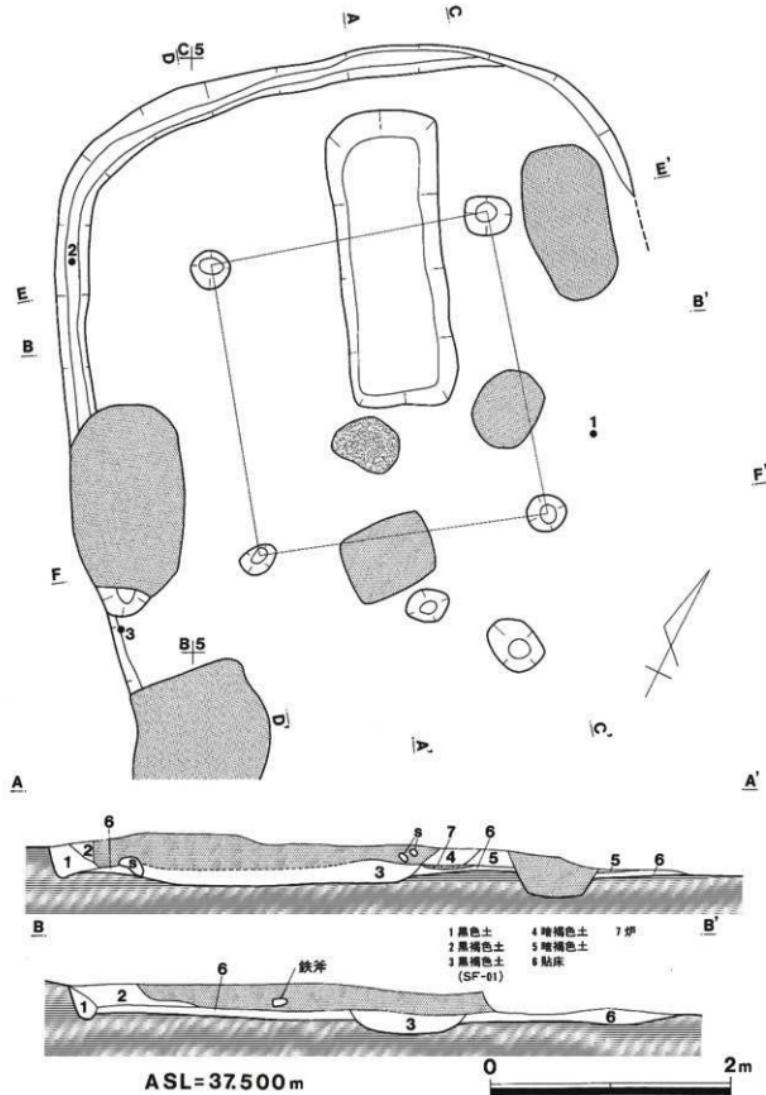
1. 遺構

1) 赤沢遺跡（第3～10図）

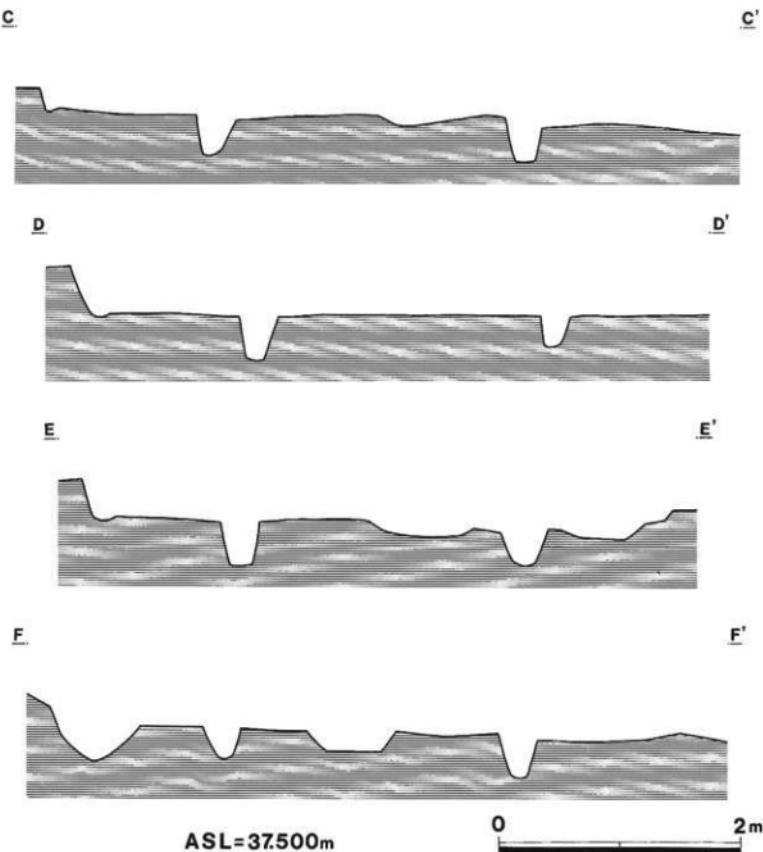
赤沢遺跡は南東に張り出す細い丘陵の先端にある独立した高地上に占地している。用地内では東端に位置し、丘陵のすぐ下には家代川が流れ、眼下には沖積平野が広がる。標高は約38mを測り、低地との標高差は約12mを測る。西側半分は墓地として既に造成されていたため調査区からはずし、東側半分の荒れ地を調査対象地としたが、南端部は茶畠として削平されていた。



第3図 赤沢遺跡遺構全体図



第4図 SB01実測図(1)



第5図 SB01実測図(2)

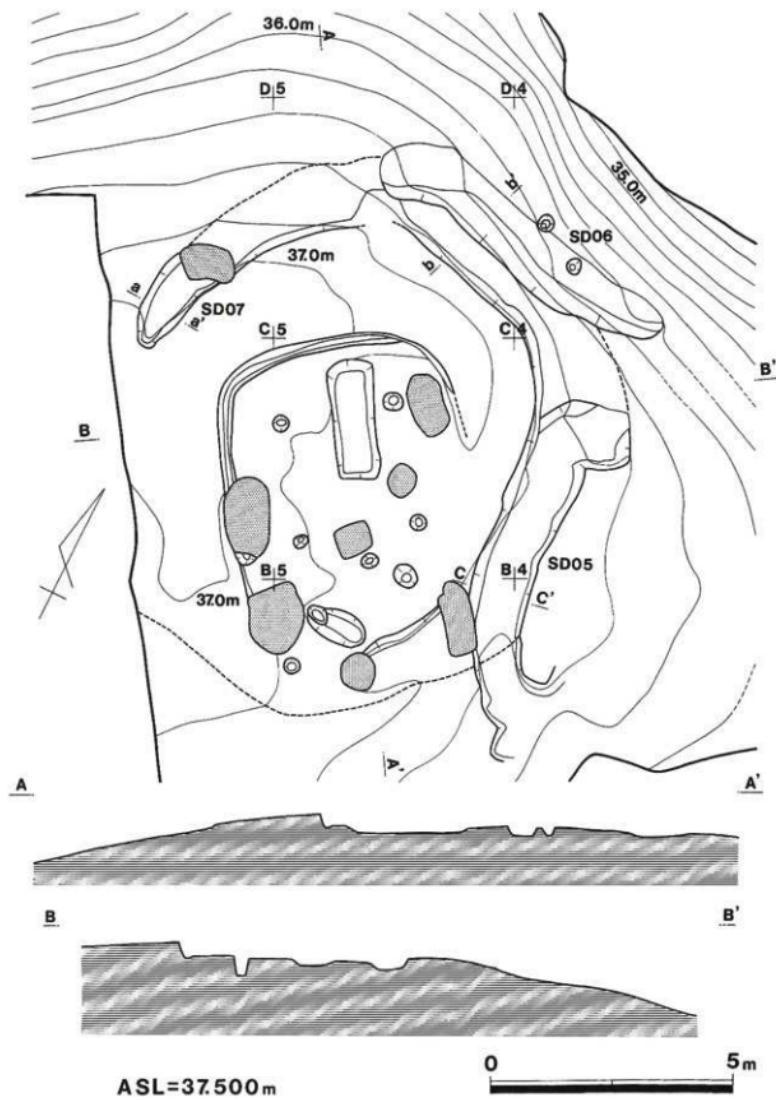
①豊穴住居(第4・5図)

SB01

調査区C-4グリッドを中心に検出された。丘陵のほぼ中央に占地する。赤渕1号墳の主体部や近・現代の墓壙による擾乱、削平を受けていた。

規模は南壁と東壁が削平されており明確でないが、遺存する北・西壁と柱穴との距離から復元すると、推定で南北5.8m、東西5.2mとなる。よって平面形は南北に長径をもつ隅丸長方形を呈すものと考えられる。確認面からの深さは38cmを測る。

主柱穴は4本で、柱間はE-E'間2.6m、その他は2.3mを測るほぼ正方形の配列を呈す。掘り方は長径34~40cm、深さ28~36cmを測る。



第6図 赤堀1号墳実測図(1)

炉は中央やや南寄りに設けられており、床面を皿状に浅く掘りくぼめた焼土面として検出された。壁溝は北壁と西壁のコーナー付近にて検出された。規模はいずれも平均値で幅20cm、深さ7cmを測る。西壁際の一部と北西コーナー壁際では壁溝は認められなかったため、全周しないものと考えられる。

床面は粘性の強い黄褐色土を混ぜた土によって、平均8cm程の厚さで貼床が形成されている。貼床撤去後の掘り方ではピット1基が検出された他はほぼ平坦であった。

出土遺物はほとんど土器小片であったが、赤測1号墳主体部と擾乱の及ばなかった壁沿いから古墳時代前期に属する壺形土器(1)、台付壺形土器(2)がほぼ床面直上で出土している。

②赤測1号墳(第6~8回)

S F 0 1 • S D 0 7

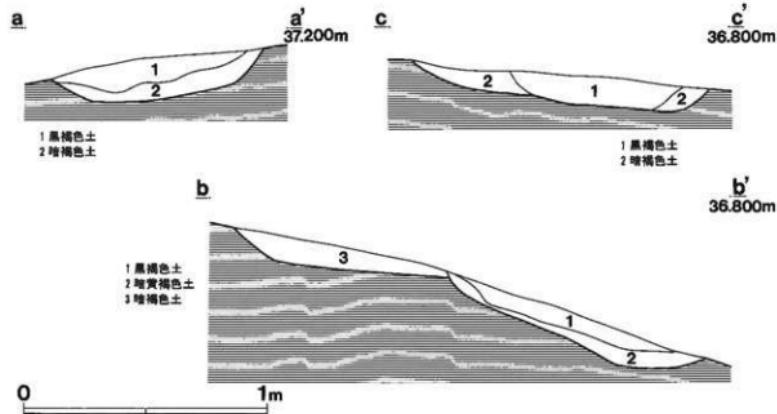
調査区B-D-3~5グリッドに位置し、S B 0 1同様丘陵のほぼ中央に占地している。S B 0 1、S D 0 5・0 6を切って築造されている。

擾乱と削平のため規模は明確にし得ないが、コンターラインから想定すると、南北約11.5m、東西約10mを測る円墳と思われる。高さは現況で40cmを測り、盛土は削平のため確認されなかった。

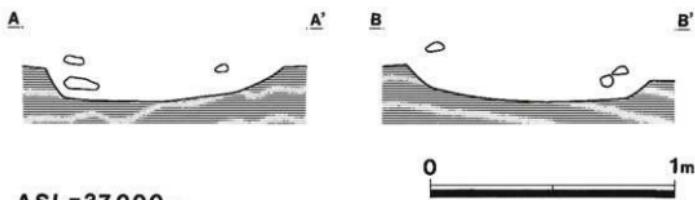
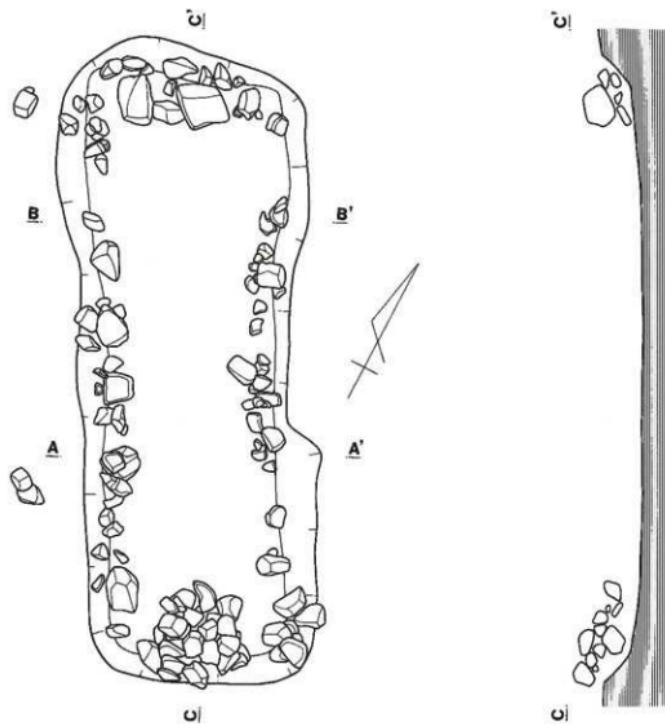
周溝(S D 0 7)は南側は削平のため遺存しなかったが、西側については確認できなかった。全周していたかは不明である。規模は遺存する部分で幅1.1m、深さ20cmを測る。

主体部(S F 0 1)は墳丘のほぼ中央に設けられた木棺直葬であるが、上層が擾乱されていたためS B 0 1の床面近くで検出された。主軸方位はN-28°~Wを測る。掘り方の平面形は長方形を呈し、規模は2.75m×0.95m、深さ15cmを測る。掘り方の側壁には長径5~30cm大の躰をめぐらせており、小口部分には大型の躰が多く用いている。躰と掘り方の間には褐色の粘性土が確認できる。

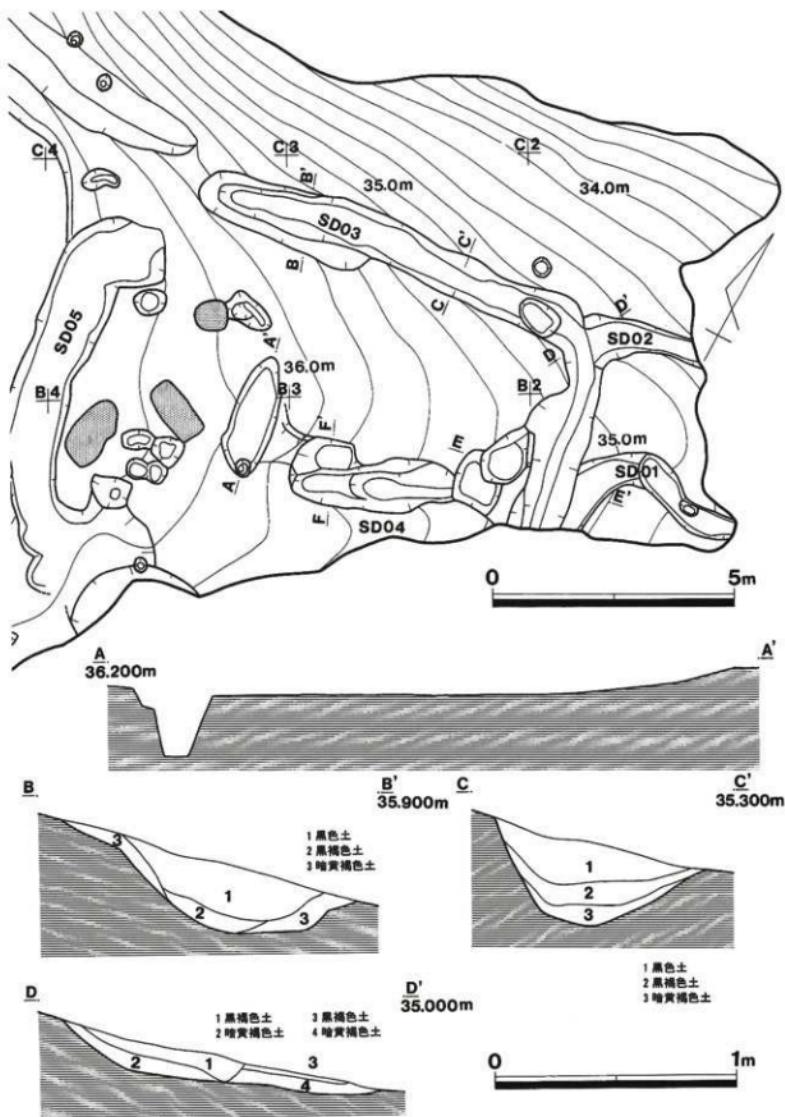
出土遺物は主体部覆土中よりガラス製小玉4点(46~49)が出土している。主体部周辺の擾乱土中より主体部の躰に混じて鐵斧(38)、馬具“轡”(39~41)が出土している。本来、主体部に副葬されていたものが盜掘などの擾乱によって主体部外に出されたものであろう。周溝からの出土遺物は無かった。



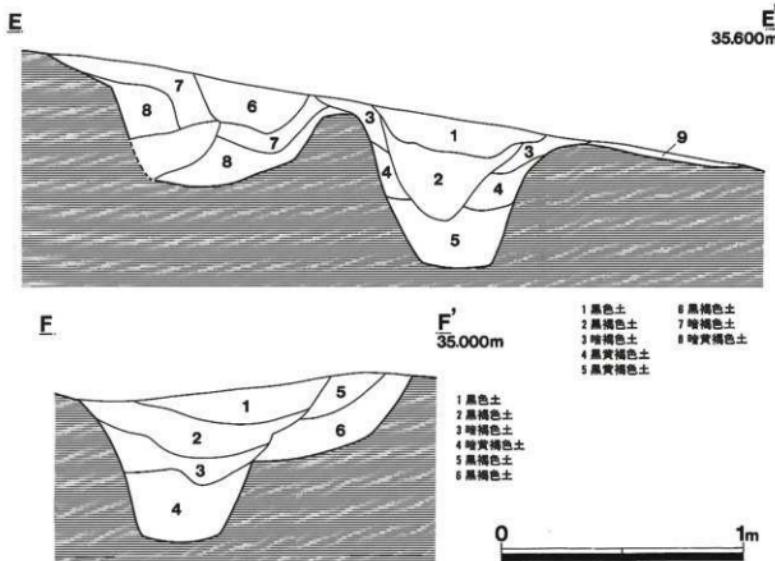
第7図 赤測1号墳実測図(2)



第8図 赤測1号墳主体部(SF 01)実測図



第9図 溝状遺構実測図(1)



第10図 溝状造構実測図（2）

③溝状造構（第9・10図）

SD 01～06

溝状造構は赤渕1号墳の周溝であるSD 07を除くと6条検出された。主に調査区の東側で検出された。その形態に特徴がみられるSD 03を中心で説明する。

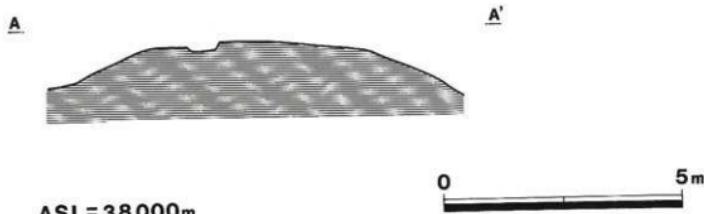
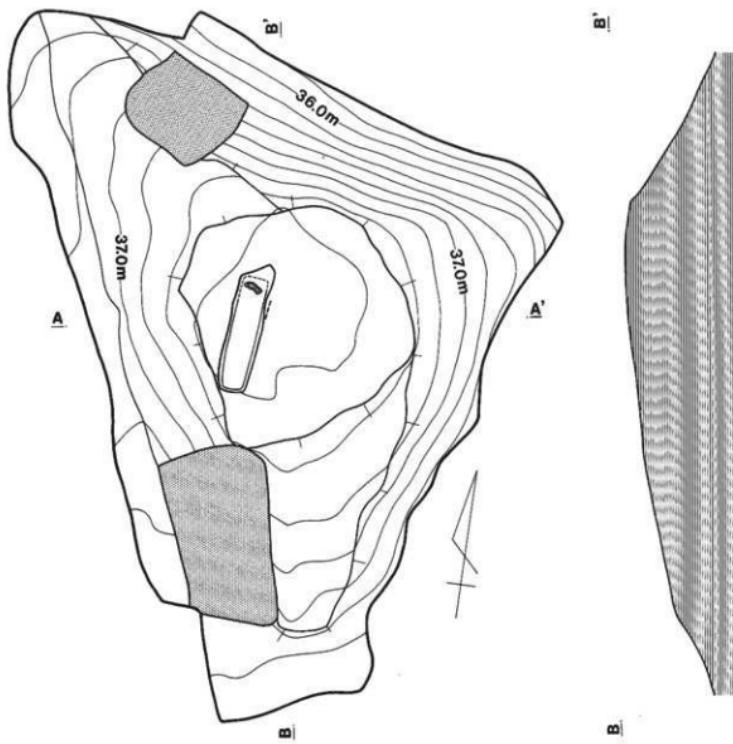
SD 03は丘陵の尾根に平行する形で東西に延び、途中から90度南に方向を変えて調査区外へ延びる。規模は調査区外へ延びた部分が既に削平されているため確認し得た部分のみを示しておくと、全長13.5m、最大幅1.45m、最深部56cmを測る。東西部分の深さは平均で30cm程であるが、南北部分では平均で50cmと深くなる。重複するSD 01・02、土壌など切っていることが土層観察によって確認された。出土遺物は土師器片が少量みられたが、図示可能なものはほとんど無かった。時期は古墳時代前期と考えられる。

SD 06はSD 03と一直線上には並ばないが、平行にはしる溝である。SD 05はSD 03の南北部と平行になる。その配列より方形の区画が存在するようにも見えるが、その性格については不明である。いずれも出土遺物に乏しく時期判断もできないためその同時性については疑問が残る。

2) 赤渕2号墳（第11・12図）

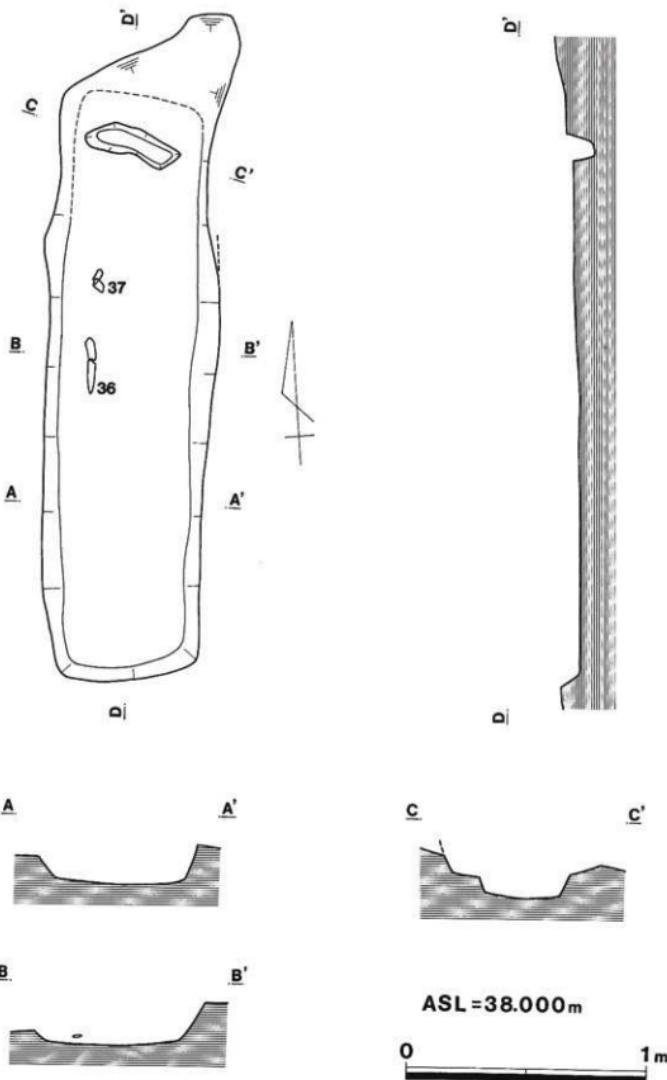
赤渕2号墳は、1号墳（赤渕遺跡）が占地する台地から、小さな谷を挟んで北西に連なる細い尾根上に位置する。標高は38mを測る。

調査区西側は山道として削平され、東側も墳丘盛土はおろか地山も自然崩落よって原形を留めていない。そのため墳丘形、規模については明確にし得ないが、推定で10m前後の円墳であったと考えられる。南側では削り込みによる墳丘の区画が確認できる。

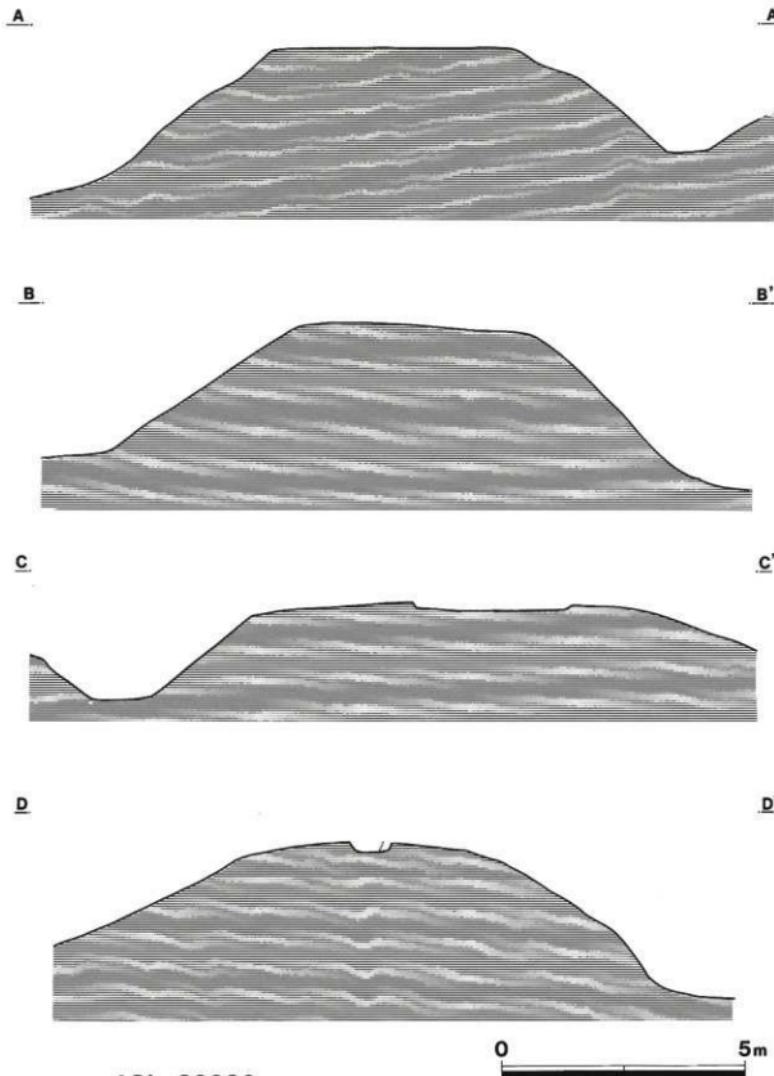


ASL = 38.000m

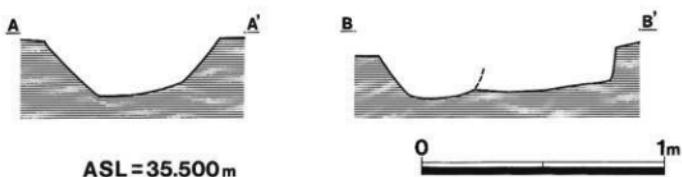
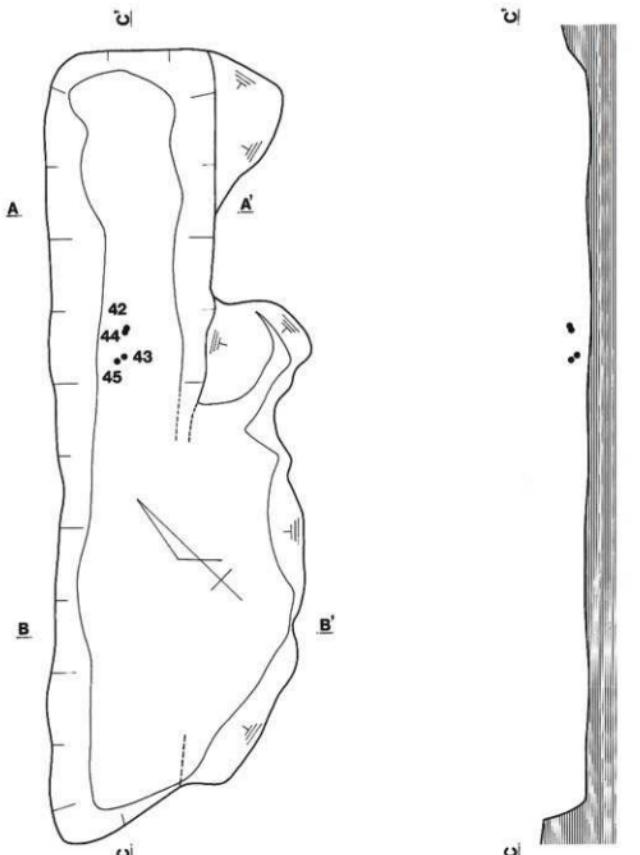
第11図 赤渕2号墳実測図



第12図 赤瀬2号墳主体部実測図



第14図 中川原古墳実測図（2）



第15図 中川原古墳主体部 (S F 0 1) 実測図

主体部は墳丘西寄りに設けられた木棺直葬で、主軸方位はN-9°-Eを測る。掘り方は北部が擾乱されており、底面にも細長いピットがあるが小口に関するものではない。平面形は長方形を呈し、底面は平坦である。規模は2.6m(推定)×0.7m、深さ18cmを測る。

出土遺物は底面よりやや浮いた状態で短剣2本(36・37)が出土しているが、どちらも破損していたことから何等かの擾乱が及んだものと考えられる。

3) 中川原古墳(第13~16図)

中川原古墳は、赤渕遺跡、赤渕古墳の立地する丘陵から谷田を隔てた丘陵上に立地しており、標高36mを測る。

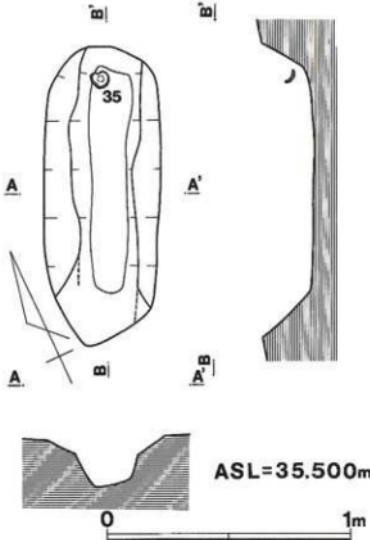
調査開始当初、尾根上に墳丘状の高まりが2つ隣接して存在することから2基の古墳と考えられたが、調査の結果、古墳と断定できたのは北側部分のみであった。南側部分は稻荷の祠が祀られており、地元の人々からは『ざんげ山』と呼ばれていた。北へ20m程離れた丘陵上にも祠があり、『がんじゅさま』(打越遺跡)の名で地元住民からは信仰の対象として比較的親しまれてきたのに対し、『ざんげ山』はどちらかと言えば禁忌の地であったらしくあまり人が入ることはなかったようである。また地形も方墳と見まがうばかりに四角く成形されていた。祠の四辺と台地の四辺が平行になることから建立以降に成形されたものであろう。南側部分の方が平野をよりよく眺望できることを勘案すると、古墳であったものが祠建立時に墳頂が削平され、墳丘も方形に成形されたものと考えられる。

中川原古墳も南側の台地ほどではないが、墳丘裾は削平されているため墳丘形・規模については明確にし得ない。コンターラインから想定すると、南北約14m、東西約12mを測る稍円形を呈すものと考えられる。南北に延びた丘陵の自然地形に制約されていることが窺える。高さは現況(北裾)で1mを測る。盛土は削平のため確認できなかった。

主体部(SF01)は墳頂のほぼ中央に設けられているが、上層及び東壁は擾乱されている。主軸方位はN-46°-Eを測る。掘り方の平面形は長方形を呈し、規模は3.3m×0.7m、深さ20cmを測る。木棺直葬であるが、掘り方上面に比べ底面が狭く、断面形は逆台形を呈すことから割竹型木棺を納めていたとも考えられる。

出土遺物は、主体部より勾玉1点(42)、管玉3点(43~45)が出土している。掘り方底面よりあまり浮いていないことと、出土位置にもまとまりがみられることから副葬時に被葬者が身に付けていた装飾品であろう。

主体部の南側には、平面長方形の1.25m×0.5m、深さ20cmを測る土壙(SF02)が検出された。掘り方の断面形は2段の傾斜を有しており底面は15cmと狭くなる。覆土中よりかわらけ(35)が出土している。また、覆土には若干の炭化物がみられた。



第16図 中川原古墳SF02実測図

④ 打越遺跡（第17・18図）

本遺跡は、用地北部の西側から東側に延びる尾根の先端に立地する。東西に長く、斜面裾と頂上部との比高差は3mを測る。頂上部には幹の直径約1m、高さ約15mの桧があり、その桧の根が丘陵を掘むかのように南北に延びている。更にその根元（南側）には木製の祠が祀られていた。地元の人々の話では、石を御神体とする信仰の対象として、江戸時代中頃より『がんじゅさま』の名で親しまれてきたということである。

当初その地形より古墳と考えられたが、トレンチによる確認調査の結果、古墳に伴う主体部もしくはそれに関連するような遺構は全くみられなかった。しかし、頂上部より多数のかわらけ・銅鏡が出土し、東斜面中腹より骨片・銅鏡が出土したため古墳以外の遺構の存在が確実視された。そのため引き平面調査を行った。

① 性格不明遺構

S X 0 1

丘陵頂上部にあった祠の下より検出。平面形は南北に長いいびつな方形を呈す。特に東側は木根による搅乱のため、やや突出しており立ち上がりも明確でない。規模は長径1.89m、短径1.14mを測り、確認面からの深さは8cmを測る。南隅には長径0.35m、深さ13cmを測る不整円形のピットが存在する。

覆土中及び確認面上より、かわらけ・陶器類・黄色粘土ブロック・角礫が出土した。かわらけと陶器類の多くは遺構の南東隅から、一部は遺構外にかけて集中して出土したが、出土レベルは確認面より上面であった。破損したものも数点みられたが、多くは完形であった。黄色粘土ブロックと角礫の出土状態は、多くは遺構の北半分に集中しており、ブロックの一部は遺構外に及んでいた。出土レベルはいずれも覆土中からの出土であり、相対的にはブロックの上から角礫が出土している。

現存していた祠には、花崗岩製の切り石と長径30cm大の河原石が礎石として用いられていた。またその祠は昭和30年頃に、先代の老朽化に伴って再建立されたものであることから、今回検出されたブロック、角礫は先代、もしくはそれ以前の祠の基礎部に用いられていたものと考えられる。かわらけ、陶器類も先代、それ以前に供献されたものであろう。出土状態からは整然と原位置を留めているとは言えず、特にブロックと角礫については再建立の際、もしくはそれ以前に手を加えられているようである。S X 0 1 と出土遺物の関係について、遺物のいくつかはその覆土中からの出土であり遺物の集中する北半分は礎石の掘り方の一部とも考えられる。

② 土 壤

S F 0 1

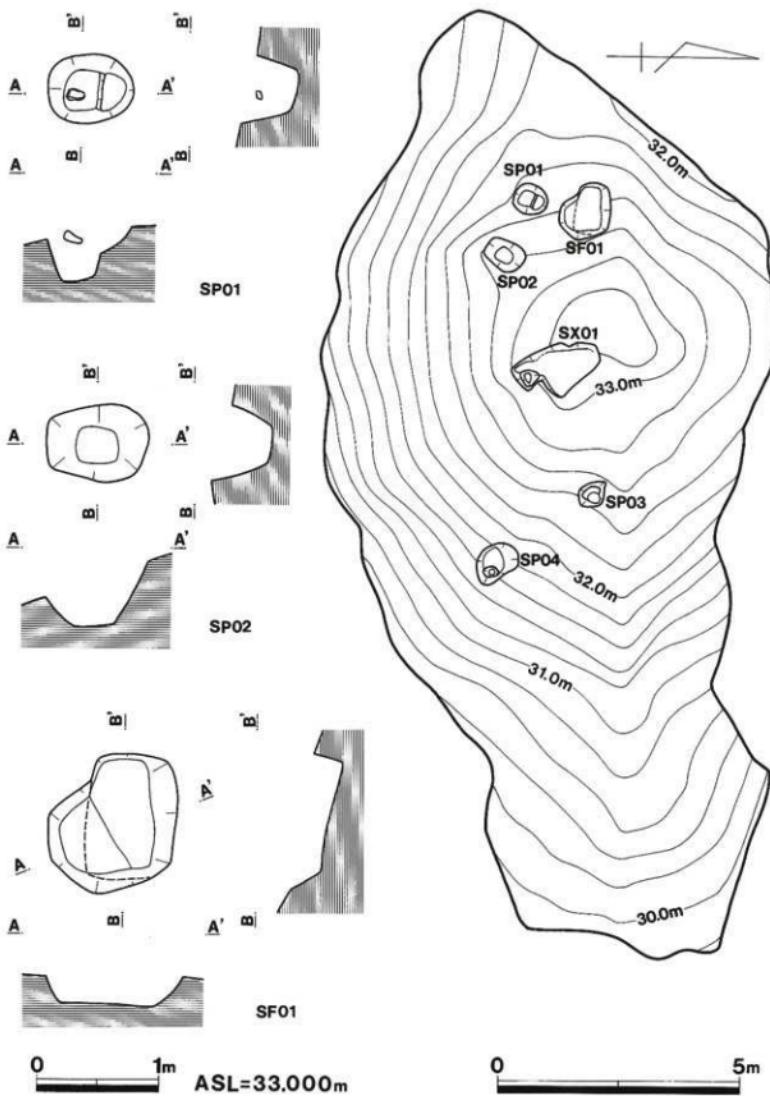
調査区西斜面にて検出。東西方向に長軸をもつ方形の土壤と、不整円形のピット状の遺構が重複しており、遺構確認時に土壤がピットを切っているのが確認できた。土壤の規模は長径1.04m、短径0.71m、確認面からの深さは26cmを測る。主軸方位はN-87°-Wを測る。

覆土中からは少量の炭化物と共に、寛永通寶（1～3）が出土していることから、江戸時代後期の土壤と考えられる。

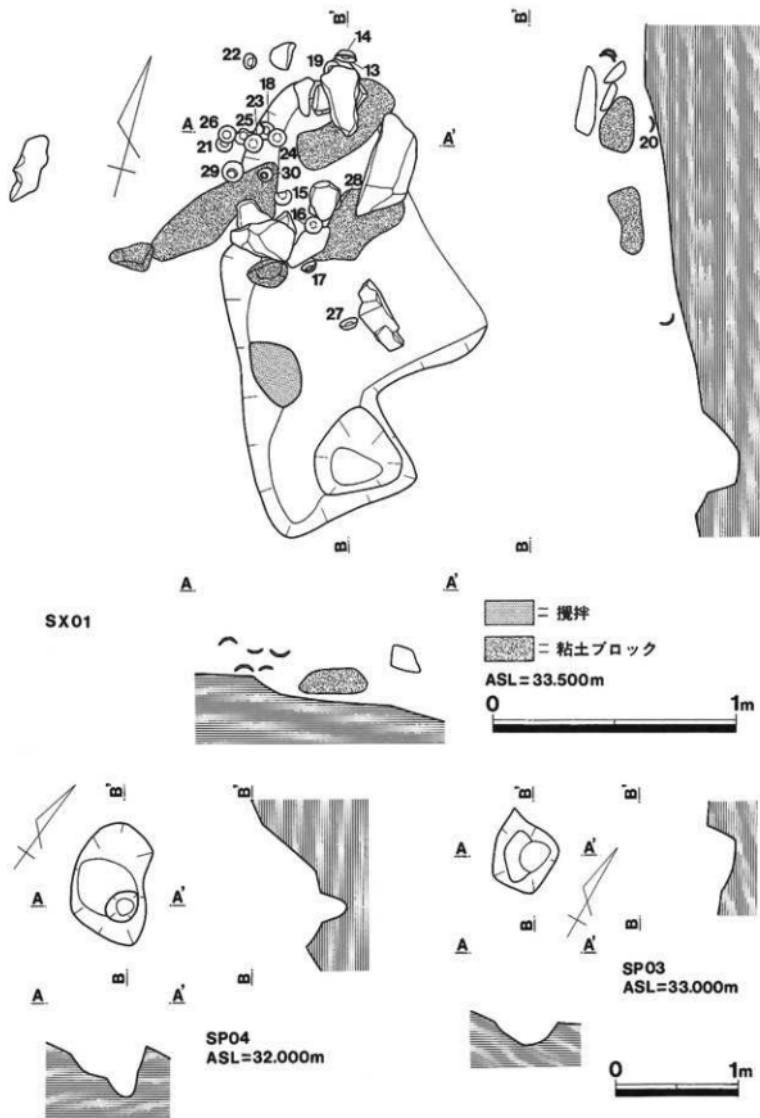
③ ピット

ピットは4基検出されたが、構築物を想定できるような配列を示すものではない。S P 0 1 と 0 2 は西斜面で、S P 0 3 と 0 4 は東斜面にて検出された。以下、各々の規模と特徴を示しておく。

S P 0 1 は長径72cm、短径58cm、深さ40cmを測る。覆土上層より河原石が出土している。S P 0 2 は長径84cm、短径63cm、深さ50cmを測り、不整方形を呈す。S P 0 3 は長径72cm、短径55cm、深さ13cmを測る。S P 0 4 は長径52cm、短径58cm、深さ68cmを測る。低面の一隅が20cm程深くなっている。



第17図 打越遺跡遺構全体図、SF01、ピット実測図



第18図 SX01、ピット実測図

5) 長沢遺跡（第19～21図）

長沢遺跡は土地区画整理用地西端の尾根上に位置するが、厳密には遺跡の東半分が今回の調査対象地で、東半分は隣接する県総合教育センター建設用地内に属している。遺跡範囲を東西に分断される形で開発が進められ、それに伴う埋蔵文化財調査も分けて行われた。調査開始当初、長沢古墳群に属する一古墳と考えられていたが、トレンチによる確認調査の結果、古墳と考えられる遺構は検出されなかった。しかし、焼土と炭化物を伴う集石の一部が確認されたため、引き続き平面調査を行うこととした。

本遺跡の占地する尾根は、東西を開析された北から南へ延びるやせ尾根で、その丘陵頂上部にはほとんど平坦がない急峻な地形である。標高は66mを測る。

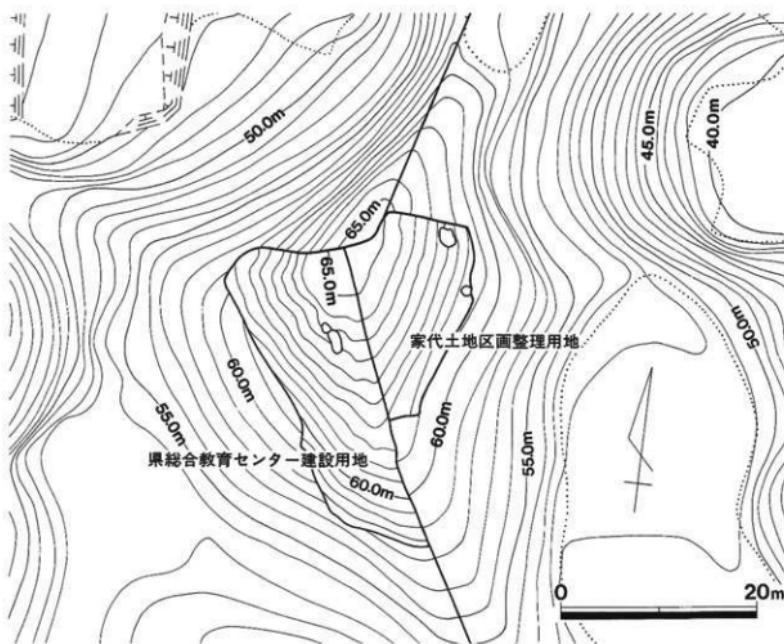
集石遺構

S X 0 1

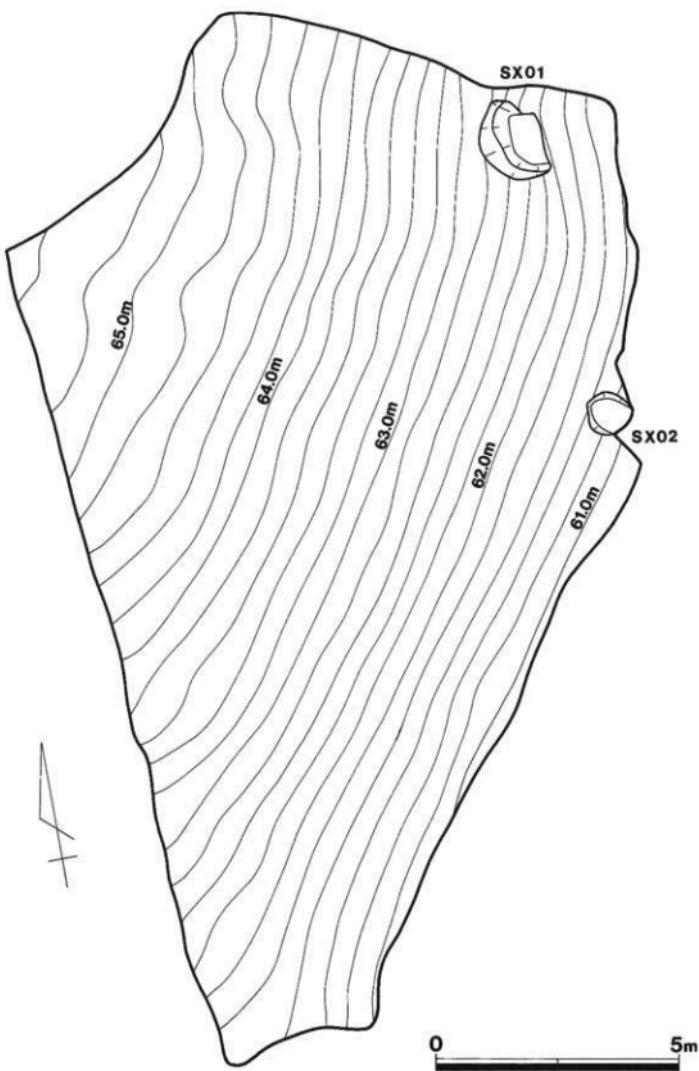
用地東斜面、標高62m付近に位置する。

形態は斜面上方を半円形状に削りだし、長径1.3m程の平坦部を造っている。規模は長径1.8m、短径1.28m、確認面での斜面上方から平坦面までの深さは、0.62mを測る。平坦面より4cm程浮いた状態で長径5～20cm大の礫が出土した。覆土は地山の自然礫を含んだ暗褐色土で、礫に混じって焼土と炭化物が検出された。

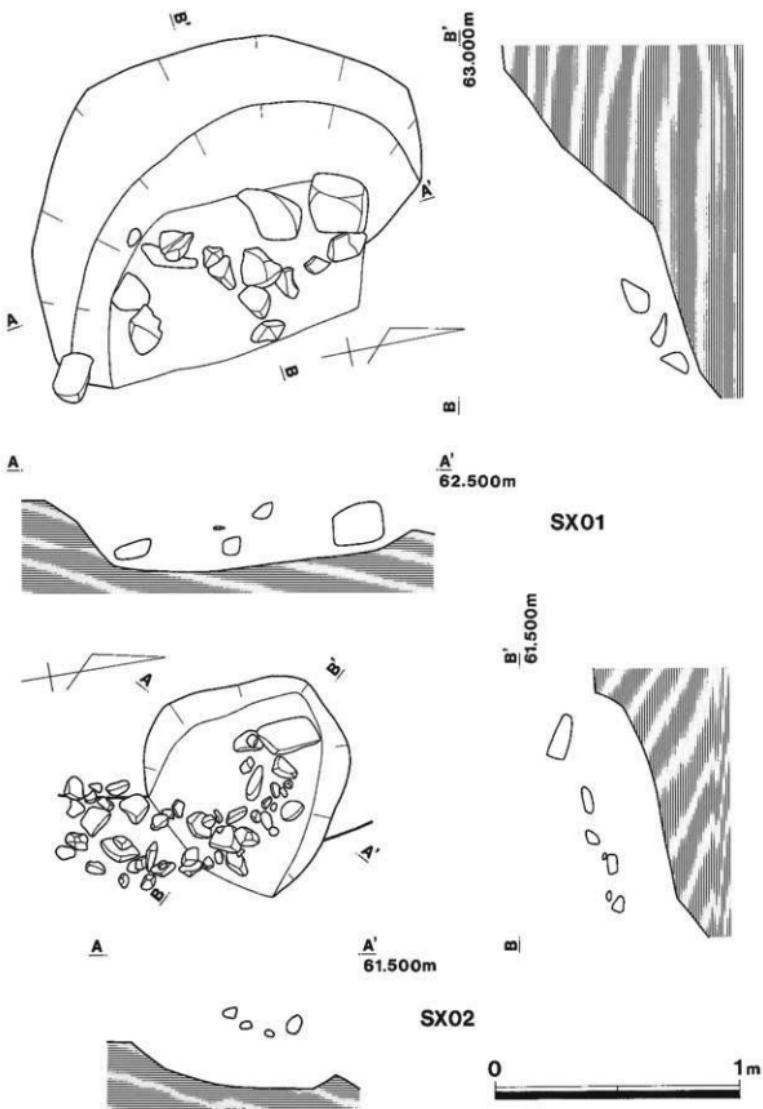
時期については、礫以外の伴出遺物がないため不明である。



第18図 長沢遺跡全体図



第20図 長沢遺跡造構全体図



第21図 SX01・SX02実測図

S X 0 2

S X 0 1 同様、用地東斜面、標高61m付近に位置する。

形態は不整円形の掘り込みで、斜面下方の立ち上がりは自然崩落によって流失している。規模は現存径0.85m程で、確認面からの深さは0.15cmである。長径3~25cm大の礫と、S X 0 1 同様焼土と炭化物が検出された。礫の半分は、崩落の際下方に流れ出ている。

時期については、礫以外の伴出遺物がないため不明である。

西側の県総合教育センター建設用地内からは、弥生時代中期前葉（丸子式）の土器片を伴う土壤が1基検出されているが、今回検出されたS X 0 1・0 2との関係については明確にできなかった。

2. 遺 物

ここでは、各遺跡の遺物をその種類毎に説明していく。今回の調査での出土遺物は土器（古式土器・縄文式土器）、かわらけ、鉄製品（短剣・馬具・鉄斧）、装身具（勾玉・管玉など）とバラエティーに富むものの、総量は全遺跡を合わせてもテンバコ（545×336×200）3杯程で非常に少ない。

1) 土 器（第22図）

土器類は、すべて赤測遺跡からの出土である。その出土量はテンバコ1杯程と極めて少なく、そのほとんどが破片であった。以下番号順に説明していく。

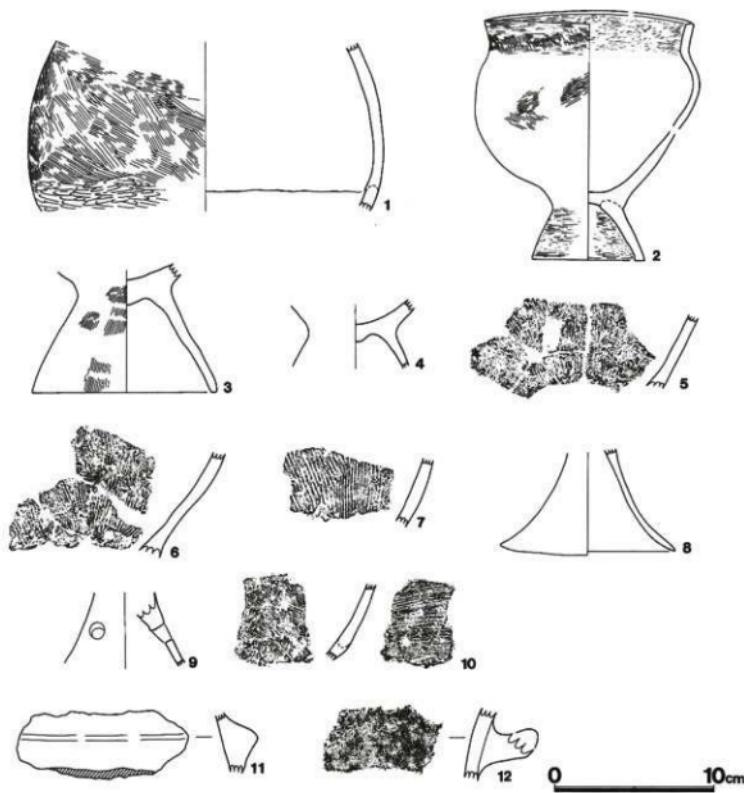
1~9は、S B 0 1 出土土器である。1は壺形土器である。口縁部と底部を欠損するが、胴部は全周する。外面上部には斜位のハケが施される。下半部には横位のミガキが施されるが、部分的にミガキ調整前のハケが認められる。2は台付壺形土器である。蔓上半部約1/2を欠損する。頭部はあまり屈曲せず、胴部にはかなり歪が認められる。脚部は直線的に広がる。口縁部外面は縦位のハケ目調整の後、部分的にナデ消している。胴部外面は全体に器面荒れが著しいが、部分的に斜位のハケ目が認められる。脚部外面はナデが施される。内面は口縁部と脚部にナデが認められる。3は台付壺形土器の脚部片である。外面には縦位のハケが施される。4は台付壺形土器の接合部である。器面荒れが著しく調整は不明。5~7は台付壺形土器の胴部片である。いずれも縦位のハケが施される。8は器台形土器の脚部片である。端部に歪が認められる。器面荒れが著しく調整は不明。9は器台形土器の脚部片である。円形のスカシがある。10はS B 0 3 出土の台付壺形土器の胴部片である。外面には斜位のハケが、内面には横位のハケが施される。

11~12は遺構外出土の縄文土器片である。11は器形・部位は不明であるが、その形状より有孔鍔付き土器の貼り付け凸帯部分の可能性がある。色調は表面赤黄褐色、内面黒色を呈し、胎土には黒雲母・長石・石英・砂粒を含む。無文である。12も器形・部位は不明である。器面に凸帯が付くが、その端部は欠損している。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には金雲母・長石・石英・砂粒を含む。無文である。

2) かわらけ・陶磁器（第23図）

13~28は打越遺跡S X 0 1 出土のかわらけである。いずれもロクロ成形で底部には糸切り痕が認められる。内外面、見込みを横ナデしている。平底のものと底部中央がわずかにへこむものがある。口径は8cm以下ですべて7cm前後を計り、器高は1.5cm前後を計る。焼成はよく、硬質である。

29・30は打越遺跡S X 0 1 出土の陶器である。29は口径8.2cm、高さ4.4cmを計る陶器湯呑である。淡緑色の施釉と、鉄釉の染付で鶴、岩、草を描いている。高台には施釉は及ばない。30は口径5.2cm、器高3.1cmを計る磁器盃である。透明釉と松竹梅をモチーフとした染め付けが施されている。



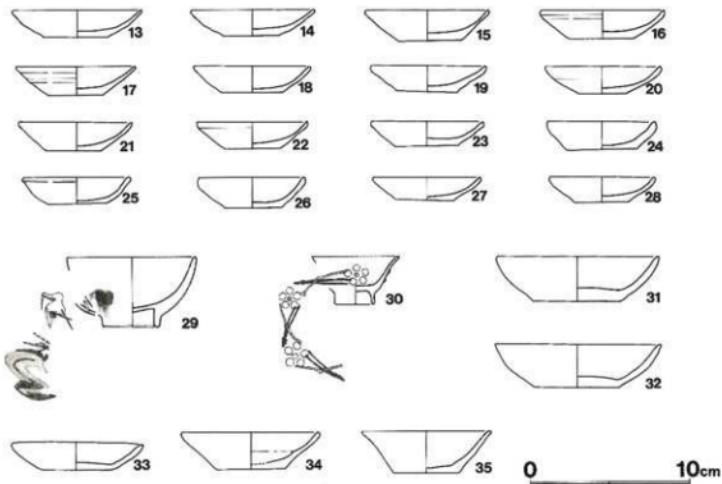
第22図 出出土器実測図

31～35は中川原古墳出土のかわらけである。31と32は古墳主体部上層出土で、他のものに比べ大きく、口径は10cm程度器高も2.5cm前後を計る。ロクロ成形内外面、見込みを横ナデしている。焼成は土師質でややあまい。33は口径8.1cm、器高1.8cmを計る。34は口径8.5cm、器高2.3cmを計る。ロクロ成形後ナデ調整、焼成は土師質でややあまい。35はS F O 2出土で、口径7.9cm、器高2.6cmを計る。ロクロ成形後ナデ調整、焼成は土師質である。

3) 鉄製品（第24図）

36・37は赤渕2号墳主体部出土の短剣である。36は現存長24.4cmで茎を欠損している。幅3.3cm、厚さ0.55cmを計る。切先付近には非常に細かい繊維痕が確認できる。

37は刀身前端部と茎尻を欠損する。現存長23.8cm、刀身幅3.85cm、刀身の厚さ0.75cm、茎の厚さ0.5cmを計る。闇は明瞭でなく緩やかな曲線で斜めに切れ込む形式である。刀身の幅が比較的広く、茎も現存長で9cm程度を計る長い形式のものであることから短剣とはいえ大型のものであろう。



第23図 出土かわらけ・陶磁器実測図

38は赤渕遺跡S B 0 1櫻乱土からの出土であるが、本来赤渕1号墳主体部に伴う袋状鉄斧である。ほぼ完存しており、全長9.55cm、最大幅5.4cmを計る。刃部は擦り減っておりかなり使い込まれている。39～41は櫛である。赤渕遺跡S B 0 1櫻乱土出土であるが、38の鉄斧同様、赤渕1号墳主体部に伴うものである。39と40はどちらも素環鏡板に衡が連結したもので、本来は39と40とで素環鏡板二連衡の一組の櫛を成すものである。39の素環鏡板は一部欠損しているが、形態は40・41同様円形を呈すと考えられる。衡は長さ9.2cmを計る。基部は太く断面形は方形を呈すが、御金と衡先環は基部に比べ細い。40の素環鏡板は長径5.85cmを計り、ほぼ円形を呈す。立間に相当する個所、及び引手も確認できない。衡は長さ8.3cmを測る。41も円形の素環鏡板で、立間と引手は確認できない。長径5.75cmを計る。

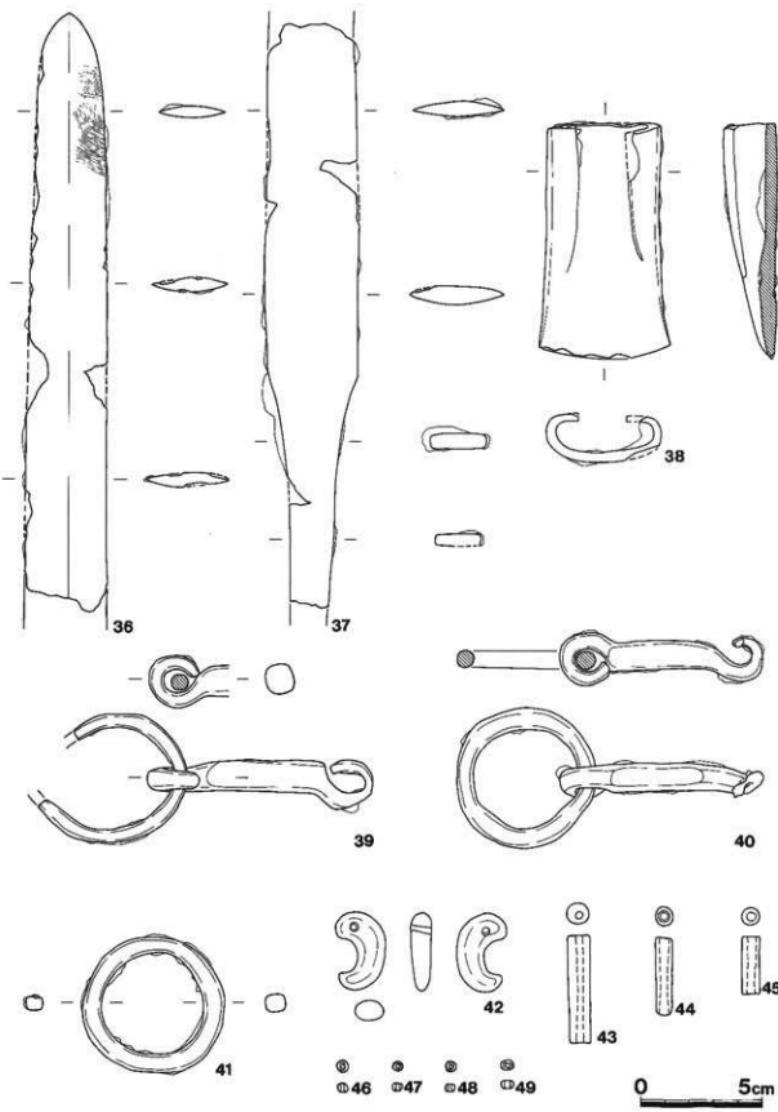
立間と引手は確認されなかったが、衡先環に引手が入るスペースがないことからどちらも鏡板に直接取り付けられたものと考えられ、皮革などの有機質を材料としていたため遺存しなかったのであろう。これらの素環鏡板は円形の環のみの立間の全く見られない立間空連素環鏡板付櫛と考えられるわけであるが、同時に兵庫鎖などによる立間と、鉄製の引手が取り付けられていたものが、後に脱落し円形の素環鏡板のみが遺存した可能性も全くないとは言えない。

4) 装身具（第24図）

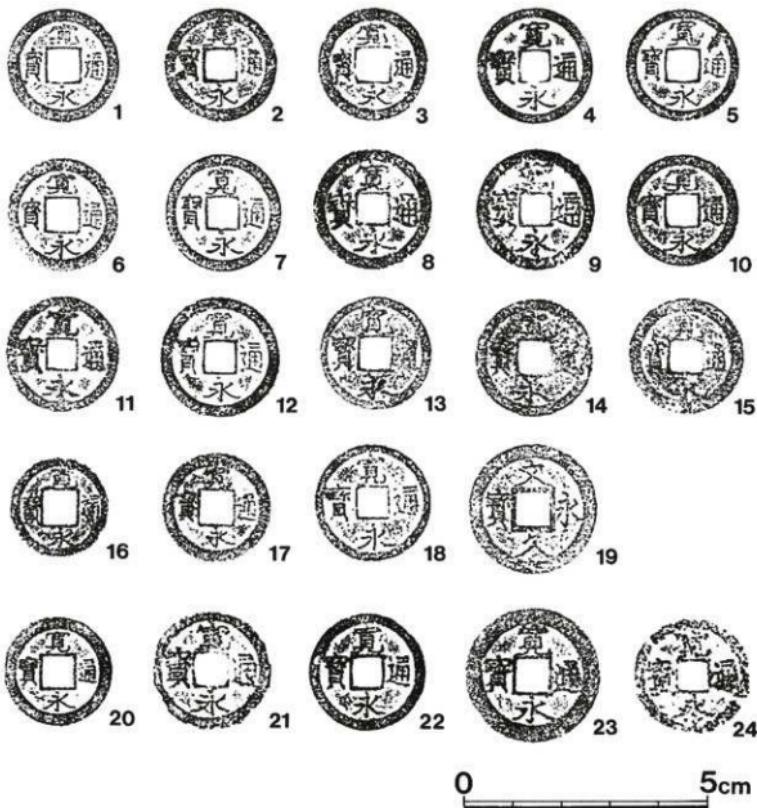
42～45は中川原古墳主体部からの出土である。42は瑪瑙製の勾玉で、白色透明を呈す。法量は縦3.15cm、横2.0cm、穿孔径0.3cmを計る。片側穿孔で、貫通面に抉りがある。

43～45はグリーンタフ製の管玉で、いずれも淡黄緑色を呈し、丁寧に研磨されてはいるがツヤがない。すべて両側穿孔である。43は縦4.35cm、横0.9cm、穿孔径0.3cmを計る。44は縦3.2cm、横0.7cm、穿孔径（上）0.4cm、（下）0.35cmを計る。両端部を欠損しており、摩滅が著しい。45は縦2.35cm、横0.75cm穿孔径0.4cmを計る。

46～49は赤渕1号墳主体部出土のガラス製小玉である。色調はいずれも淡青緑色を呈す。46は直径



第24図 鉄製品・装身具実測



第25図 古銭拓影図

0.5cm×0.45cm、長さ0.35cm、穿孔径0.15cmを計る。47は直径0.3cm×0.4cm、長さ0.3cm、穿孔径0.15cmを計る。48は直径0.45cm×0.4cm、長さ0.3cm、穿孔径0.1cmを計る。49は直径0.4cm×0.5cm、長さ0.35cm、穿孔径0.2cmを計る。

5) 古銭(第25図)

いずれも文字の判読は可能であるが、書体が不鮮明な私鉄銭・鉄写と思われるものが含まれる。文久通寶1点を除いては、他はすべて寛永通寶である。

1～19は打越遺跡出土の寛永通寶と文久通寶である。1～3はS F 0 1出土である。4～10はS X 0 1及びS X 0 1周辺の頂上付近出土である。11～19は東から南の斜面中腹から掘り出土している。

20～24は中川原古墳出土の寛永通寶である。20は古墳主体部上層出土で、他は墳頂部から中腹にかけて出土している。

III まとめ

今回の調査では調査項目でも記したように、今まで考古学的にあまり明らかになっていなかった家代地区の様相が、その一端ではあるがいくつかの成果として明示することができた。ここでは多少の考察を加えるとともに、いくつかの問題点を提示してまとめとしたい。

1. 赤渕遺跡について

赤渕遺跡において、赤渕1号墳に關係する遺構を除いた時期の明確な遺構は、古墳時代前期に比定できる竪穴住居跡だけである。その他にSD03を中心とした溝群は、古墳時代前期の可能性が十分に考えられ、更に竪穴住居との重複がないことやその方形区画を示す形態などを勘案すれば方形周溝墓であったとも考えられよう。丘陵の約半分は、既に墓地として削平されていたため全体の集落構造は明確にし得ないが、居住区として利用されていたばかりではなく墓域としても利用されていたと考えられる。

赤渕遺跡の立地する丘陵は、北から南へ張り出した痩せ尾根の先端に位置し、厳密には独立丘陵と呼べる。この独立丘陵より南西に谷田を隔てた丘陵上にある赤渕南遺跡は、かつて調査されないまま土取りによって消滅してしまったため詳細は不明であるが、弥生時代後期を中心に古墳時代前期の遺物が採取されている。そのため赤渕遺跡も弥生時代後期に集落形成が始まっていたとも考えられる。しかし、今回の調査範囲においては、擾乱を考慮しなければならないが、弥生時代後期と思われる遺物は発見されておらず集落に関する遺物はすべて古墳時代前期に属するものである。赤渕遺跡の本格的な集落形成時期は、やはり古墳時代前期と考えたい。

同形態の集落としては、袋井市の若作遺跡が挙げられる。小笠山北麓の南から北へ張り出したさほど広くない丘陵上に立地する集落である。小規模な集落が弥生時代中期から形成され始め古墳時代前期まで存続するが、集落の継続には盛衰がみられる。特に古墳時代前期の集落については、弥生時代後期の集落とは別地点にあることから、弥生時代後期から古墳時代前期への集落の存続性の断絶を窺わせている。この点は、赤渕遺跡と赤渕南遺跡の関係についても言えることかもしれない。

西遠江地方において該期に突如として出現する丘陵集落については、土器編年においてS字口縁甕をはじめとする東海西部系や近畿系の土器の出現、広がりを考え合わせ、政治的な動きに呼応して出現した集落と結論付けられている（松井1990）。今回の資料は決して好例とは言い難く、先の指摘を首肯すべく一例には不足であろう。よって即断はさけるが、比較的狭い独立丘陵という集落立地と、古墳時代前期という時代に、この集落の性格の一側面があることには変わりあるまい。

2. 赤渕・中川原古墳について

今回の調査で確認されたのはわずか3基の円墳であるが、赤渕古墳の北側でも古墳の墳丘と考えられる高まりを確認（送電線の鉄塔があるため調査不可）しており、中川原古墳の南側でも調査項目で記したように削平された古墳と考えられる高まりを確認している。用地外の尾根上については未確認であるため、今回発見されたものがすべてではない。少なくとも用地内においては5基の古墳が存在したと考えられる。中川原古墳を含めた赤渕古墳群は、一群の古墳群と考えられ、尾根を単位に2つに分けられるが、構成数は少なく散在的で横穴群のような強い集中化傾向を示さない。副葬品については何らかの遺物は認められた。

古墳の年代観について、出土遺物を中心に考えてみたい。赤渕1号墳ではその築造時期を示す遺物として、馬具（轡）、鉄斧がある。轡については、擾乱による主体部外出土であることから遺存したもの

のが完存しているとは考え難い。よって、その形式は立聞と引手が見られない類立聞空連素環鏡板付
轡とでも呼ぶべきタイプと、兵庫鎖などの立聞と引手が脱落した可能性のあるもの2形式を考慮し
なければならない。

県内出土の素環鏡板の編年を観てみると、川江秀孝氏による県内出土の馬具編年（川江1986・1992）によれば、県内で最古の素環鏡板は、6世紀中葉とされる吉影D3号墳出土の立聞に兵庫鎖が付くタイプである。続く6世紀後半ものとして釣瓶落7号墳出土の方形立聞に鉤金具を伴ったタイプや、八幡2号墳と宇洞ケ谷横穴にみられる方形立聞が付くタイプがある。6世紀後半以降、鏡板の中でも素環鏡板は主流をなし、7世紀前半に至っては方形立聞に替わって鉢具を付けたものが出現する。今のところ管見にふれた限りでは県内の立聞空連素環鏡板の類例はない。全国例では6世紀前半には横穴式石室墳、横穴などに副葬され、6世紀後半までみられるようである（坂本1985）。また、兵庫鎖立聞素環鏡板は県内出土のものはいずれも方形立聞に兵庫鎖を付けたもので、赤渕1号墳出土のものとでは素環鏡板そのものの形態が異なる。全国例では6世紀前半副葬のものが初現とされる。

県内例ではこれらの素環鏡板を副葬する古墳の主体部形態は、横穴式石室か横穴のいずれかである。全国的にみてもその傾向が窺える。赤渕古墳群の周辺域にも散在的ではあるが土橋・別所・峯横穴群をはじめとする横穴群が分布し、6世紀中葉には築造が開始されており、6世紀後半以降隆盛に向かえる。6世紀中葉以降、横穴が台頭する地域においては、その背景はわからないが、直葬墳は横穴より時期的に先行する傾向がみられ、直葬墳と横穴の同時期並存は考え難く、木棺直葬墳の築造は横穴の築造開始時期より遅るものと考えられる。赤渕1号墳の築造は、少なくとも6世紀前葉以前として誤りはなかろう。立聞空連素環鏡板としては5世紀代まで遡る可能性もある。よってこの副葬品と埋葬形態より考えられる築造年代は、5世紀末から6世紀前葉に比定できるものと考えられる。直葬墳副葬例としては極めて希であり、立聞空連素環鏡板の初現を考えるうえでも重要である。

赤渕2号墳からは、その木棺直葬の主体部より短剣が2本出土している。間にその特徴がみられ、緩やかな曲線で斜めに切れ込む形式である。この形式は古墳時代前期から中期に多くみられ、その中心は5世紀代に求められる（吉岡1992）。他に築造時期判断の傍証になり得るものがないため、5世紀代という大まかな年代でとらえておきたい。

中川原古墳からは、その木棺直葬の主体部より瑪瑙製の勾玉とグリーンタフ製の管玉が出土している。出土した管玉の石材がグリーンタフで、両側穿孔であることから6世紀代まで降ると考えられず、こちらも5世紀代としておきたい。

以上のように3基の副葬品の種類はいずれも異なる。今のところ大まかな年代観しか与えられない赤渕2号墳と中川原古墳は、どちらが先行するか明確にし得ないが、赤渕1号墳との対比については、赤渕2号墳には中期大型古墳の多量な鉄製武器副葬の反映が窺われ、赤渕1号墳の馬具の空連素環鏡板はその後の6世紀代に中心が求められるものである。とすれば赤渕2号墳・中川原古墳・赤渕1号古墳という形成順が考えられる。いずれにせよ5世紀代から6世紀初頭にかけての造墓と考えられ、6世紀前葉以降のものは存在せず、6世紀前葉以降これらの造墓集団の急激な衰退が看取される。

墳丘・埋葬施設について、赤渕2号墳と中川原古墳は地山を削り出して墳丘が形成されており、赤渕2号墳は既に削平されていたが、その立地、周溝の存在から考えて盛土によって墳丘が形成されたいたと考えられる。

埋葬施設はいずれも木棺直葬を採用しているが、その掘り方の形態・施設には違いがみられる。赤渕2号墳の主体部の掘り方は、平面長方形、平坦な底面であることから木棺形態は箱式木棺と考えられる。赤渕1号墳は部分的に攢乱が及んでいるが、平面形は細長の長方形で掘り方上面に比べ底面

幅が狭い逆台形を呈す。箱式木棺と考えるより割竹形木棺であった可能性が高い。赤渕1号墳の主体部は平面長方形、平坦な掘り方であるが壁間に棺台としての礫が並べられている。礫構とは異なり基本的には壁中位に1段しか存在しない点は注目される。同形態の例としては、小笠山北麓に展開する若作古墳群（袋井市教育委員会1990）や愛野向山古墳群（袋井市教育委員会1987・1988）にみられる。築造時期は5世紀後葉から6世紀前葉で、礫を並べた棺台を割竹形木棺を固定するための施設ではないかと考えられている。

赤渕・中川原古墳群と比較検討するうえで、占地、墳丘、主体部など近似する形態の古墳群としては、今のところ市内では好例がないが、先に挙げた袋井市の若作古墳群・愛野向山古墳群がその好例と言えよう。どちらも小笠山北麓に展開する5世紀後半から6世紀前半の古墳群で、痩せ尾根上に古墳群を形成し、墳丘についても地山を削り出して墳丘とする自然地形を利用したものである。主体部内の副葬品については、ほとんど何も伴わないのが一般的とさえ言える。今回の場合、調査した3基すべてに副葬品が発見されたが、量・質共に貧弱である。

これらの5世紀後半から6世紀にかけての群集墳は、その群集墳を考えるうえでまず基本となる年代観すら副葬品をはじめその遺物の少なさが困難にしているため、その被葬者の性格、当時の社会状況下での群集墳の位置づけと言った大命題にまでなかなか切り込めないのが現状である。しかし当該地域においては、横穴出現前夜の一側面を有しているだけにその課題は大きい。今後、好調査例の増加に期待したい。

《引用・参考文献》

- (1) 川江秀孝 「V 出土の馬具について」『仁田山ノ崎古墳』－出土品保存処理報告－
株原町教育委員会 1986
〃 「第四章 古墳時代 第二節 古墳時代の重要遺物 馬具」
『静岡県史』資料編3 (考古3) 静岡県 1992
- (2) 坂本美夫 『馬具』考古学ライブリー34 ニュー・サイエンス社 1985
- (3) 吉岡伸夫 「第四章 古墳時代 第二節 古墳時代の重要遺物 武器・武具」
『静岡県史』資料編3 (考古3) 静岡県 1992
- (4) 松井一明 「第3章 総括 第1節 若作遺跡」『若作遺跡・若作古墳群』
袋井市教育委員会 1990
- (5) 袋井市教育委員会 『愛野向山A-2・3・4号墳』 1987
- (6) 〃 『愛野向山A-8号墳・愛野向山墳墓群・愛野向山IV遺跡』 1988
- (7) 平野吾郎 『原野谷川流域の古墳群について』『古代探叢』 早稲田大学出版会 1981

本発掘調査を実施するにあたり、家代土地区画整理組合長 山田尚氏をはじめ組合員、地元のみなさま、掛川市役所土地区画整理課のみなさまにはひとかたならぬお世話になりました。文末ではありますが、ここに記して深く感謝の意を表します。

図 版



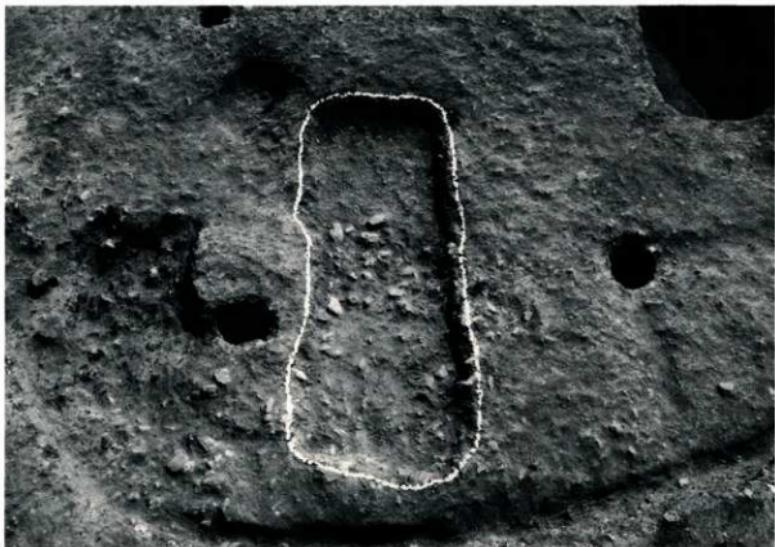
赤測遺跡全景（西より）



赤測遺跡SB01全景（北より）



赤渕I号墳全景（西より）



赤渕I号墳主体部（北より）



赤堀 2号墳全景（西より）



赤堀 2号墳主体部（南より）



中川原古墳全景（南より）



中川原古墳主体部（南より）





赤羽 2 号墳主体部
鉄剣出土状態



中川原古墳全景
(北より)



中川原古墳SF02
全景 (南より)



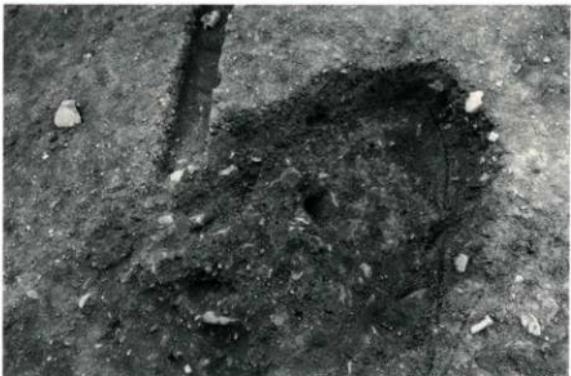
長沢遺跡全景
(北より)

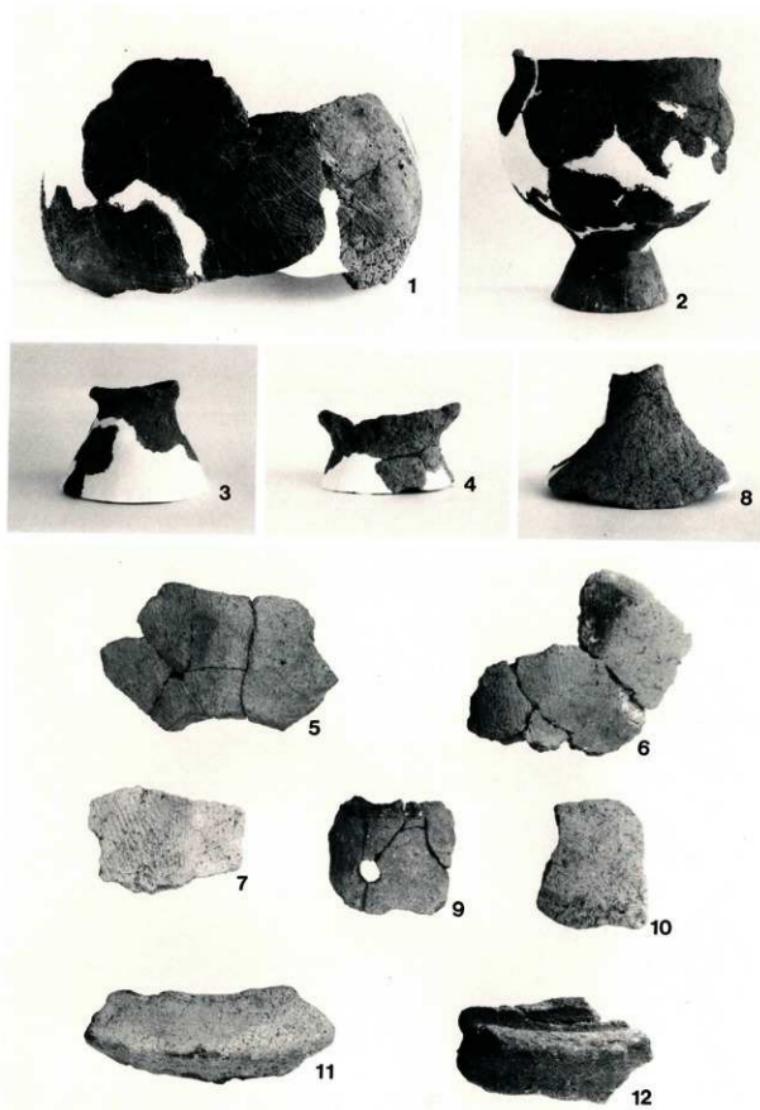


長沢遺跡SX01
礫出土状態
(東より)



長沢遺跡SX02
礫出土状態
(東より)







13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35

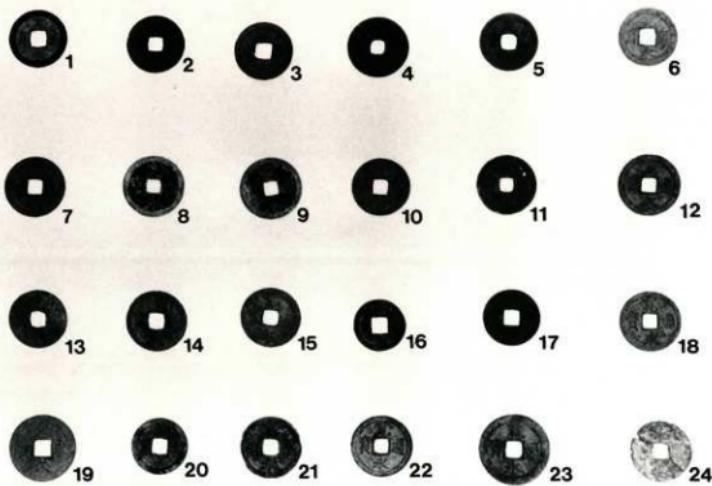


46

47

48

49



赤測遺跡・中川原古墳

発掘調査報告書

平成4年3月31日

編集発行 挂川市教育委員会
掛川市水垂51
TEL (0537) 24-7773

印 刷 株式会社 三創
静岡市中村町166-1
TEL (054) 282 4031

